劇団民藝

言わせて！今日の芝居

五十字劇評 No.67

篠田三郎・樫山文枝 文学の夕べ

【四〇代】

▼今回は、演劇ではなく朗読。第一部・藤沢周平の「山桜」は、ありありと情景が目に浮かぶ。篠田三郎さんの朗読も素晴らしかったが、そもそも文章自体が素晴らしい。まるで文で絵を描いたようなものである。また、第二部の樫山文枝さんは七人の登場人物を巧みに読み分けて演じており、生き生きとした情景描写になっていた。小説は自分で文章を読むのもよいが、朗読として聞くほうが、その文章の持つ美しさや生き生きした感じに触れることができる。ことばは、話す言葉が元来のものであり、書かれた文章はそれを写し取ったものでしかないと、今更ながら痛感した次第です。（男性）

【六〇代】

▼静かな時間。深まる情愛。男女の出会い。心の奥底の疼きの真理。一期一会だけでない、人生の再会の不思議。（女性）

▼もう「ウブ」とは言えない女が初恋のように心震わす…素敵な秋の夕べでした。思い出そうにも遠い…遠すぎる、嗚呼女心!!（女性）

▼晩秋に、男女の哀切が身に沁みた。帰りに図書館で、「山桜」を借りてきた。朗読のとおりの幕切れだった。あのひと言は、野江の行く末を暗示しているのだ。はたして、野江は婚家を出奔したのだろうか。幸せになれたのだろうか。（男性）

【七〇代】

▼朗読と聞いたので舞台は椅子とテーブルを想像していたが、会場に入りビックリ、文字通り文学の夕べにピッタリの素敵な部屋の感じ。流石劇団民藝さんですね。篠田三郎さんのさわやかな声、樫山文枝さんの甘いやさしい声に朗読もたまにはいいかな？やっぱりお芝居が観たいですね。今回はたまたま夜・昼観ることができて感じたのは、昼の方は昼らしい舞台を少し全体に明るくすると良かったかと思いました。（文学の夕べなのでいいのか？）（女性）

▼年を重ね恰好良さが極だつ篠田、樫山両名の、声色を使い分けた巧みな朗読で文学を堪能。よかったです。（女性）

▼朗読にひき込まれました。江戸情緒に浸ってゆっくり鑑賞しました。たまにはこれもいいかな？

▼久しぶりの、あまり好きではなかった朗読劇だが、せっかくだからと思い、少し調べてみた。「朗読劇は、聞き手の想像力がないと完成しない。演劇を観る場合以上に、読み手と観客が一体になり、いっしょになって作り上げるのが朗読劇だ」という説明があった。そう言われれば、今まであまり想像力を働かせてはいなかったような気がして、多少意識しながら、聴き始めた。確かに、野江の、女性の声が聞こえ、山桜の枝に手を伸ばして爪先立ちをしている、その姿が見えるような気がする。そのままその世界に入ってしまい、最後に、野江が手塚弥一郎の家を訪ねて志津に会い、志津の言葉が聞こえた途端、芝居は終わった。野江はこの後どうなるんだろうという疑問は、私には余韻ではなくて、残響だった。「夜の辛夷」は残念ながら、最前列だったけれども、よく聞こえなかった。下調べして、これも期待していたのだが…。（男性）

【年齢性別不明】

▼静かな、でも力強い語りが生き生きとして、物語の情景がくっきり浮かび、素晴らしかった。お二人の語りは再演を希望します。

編集スタッフから

例会を観終わってそのまま帰宅し、芝居の記憶も日に日に薄れていく。これって、もったいないことだと思いませんか？振り返ってみることは大事なことだと思います。芝居の感想をもう一度まとめてみる、深めてみる。劇評集への投稿はそのためのとても有効な方法です。みなさんの投稿をお待ちしています。